

WOMEN'S



NEWS

2005 DECEMBER

SPORTS

VOL. 44

FOUNDATION



プロゴルフ界の救世主は19歳の宮里藍 (フォート・キシモト)

JAPAN

Message	女子選手のユニフォーム	ミツ谷洋子	2
インタビュー	水泳の素晴らしさを伝えつづけたい	木原光知子さん	3
Opinion	「山ちゃん」に教えられたこと	関 美那子	6
	Time Travel 「スポーツ」「社会」		7
Women's Sports	草バレーボールのささやかな変化	吉沢直美	8
Column	大リーグ初の女性ゼネラルマネジャーの誕生は	山崎恵司	9
	会員の広場	光岡かおりさん 鶴見幸子さん 横地正恵さん	10
	事務局便り		11

女子選手のユニフォーム

「あんなユニフォームを着せるなんて、選手がかわいそう。何とかしてあげられないの」。たまたま女子サッカーを話題にした時、妹が強い口調でこういつてきました。

私がJリーグの理事をしていることもあり、「何とかしたら」といいたいようで、「選手たちの体型に全く合っていないし、色もひどすぎる」と、散々の評価です。

Jリーグの理事会で、女子サッカーのユニフォームについて意見を述べる機会はないのですが、そういわれて改めてユニフォームを眺めてみると、反論のしようがない状況です

上下ともダブダブのウェア。残念ながら、「格好いい」とはいえなく、流行のデザインとはいえず、「だらしない」という印象しか持てません。

長身の男子バスケットボール選手であれば、バランス的にも問題ないと思うのですが、大型でないスポーツ選手に、このようなデザインは似合いません。

スポーツファッション後進国

ユニフォームといえば、オリンピックの度に、日本選手団の開会式のウェアが話題になります。ここ20～30年の大会で、諸外国と比較して素敵なデザインだと思えたことはほとんどありません。

日本オリンピック委員会(JOC)では、森英恵ら著名なファッションデザイナーに依頼したこともありますが、残念ながら「素敵」とはいえなく、難しいデザインでした。

ある時、プロダクトデザイナーの平野拓夫さんと、スポーツウェアのデザインについて話をすることがあります。

「ミツ谷さんがいわれる通りです。海外の友人たちがいつもこういいます。『日本の工業製品は、世界トップの素晴らしいデザインなのに、スポーツウェアはどうしてあんなにひどいデザインなんだ』とね。常々、恥ずかしいことだと思っているんです」

ファッションが普及を後押し

女性スポーツの発展には、ウェアの進化が大きな要素を占めています。

洋の東西を問わず、女性は近代まで腕や足を覆う服を着ていました。スポーツをする時も、長袖にロングスカートにというスタイルです。1世紀前の絵画は、女性たちがそんな服装でテニスやアイススケートをする様子を、描いています。

日本では、明治時代の女学生は、袴姿で体操をしていました。より動きやすくするため、袴の裾を縛ったりして工夫を凝らしたり、ブルマーが取り入れられたりと、時代とともに大きく変化してきました。

そして今や、「ヘソ出しウェア」で、マラソンやゴルフをしても、誰も驚かなくなりました。

“ビートルズのセンス” に期待

そんな現代の女性スポーツウェアは、どうあるべきなのでしょう。昨年、国際サッカー連盟(FIFA)のブラッター会長が「女子選手のユニフォームは、体のラインがくっきり出るようにしたら」と発言したところ、「女性差別だ」と抗議されて撤回しました。

「体のラインがくっきり出る」というのが、どの程度「くっきり」なのかが不明ですが、前述のように、私も会長の指摘には同感です。要するにデザインの問題だと思います。

アディダスは昨春、ステラ・マッカートニーというデザイナーを起用して、新たなブランドの商品を発売しました。彼女はビートルズのポール・マッカートニーの次女で、世界のファッション界が注目する気鋭のデザイナーだそうです。

時代の空気を表現するセンスは、父親譲りなのでしょう。彼女がデザインする女性用サッカーウェアを是非、見てみたいものです。

インタビュー

水泳の素晴らしさを伝えつづけたい

スイミングアドバイザー 木原光知子さん

東京オリンピックに最年少スイマーとして出場し4位入賞を果たした木原光知子さんが、4月に、財団法人日本水泳連盟の特命事項担当理事に就任されました。競泳選手としては初の女性理事の誕生です。水泳の世界で、現在は全国10カ所のスポーツ施設を運営するビジネスウーマンでもある木原さんに、これまでの水泳人生の歩みや、仕事を含めた活動についての思いについて、うかがってみました。

(10月19日=聞き手:吉沢直美)



木原さんは今でも必ずプールに入って子供たちの指導を続けている

小学校の先生が夢を後押し

— まず、水泳を始めたきっかけから。

木原 水泳は、小学生の頃、遊びの一つとして、学校や県営のプールで夏の間、泳いでいました。6年生の時、「僕の夢・私の夢」という作文で、「水泳でオリンピックに出て、いい成績を残したい」と書きました。多分、水泳が一番楽しい遊びだったのと、ローマオリンピック(1960年)で田中聡子さんが水泳で活躍され、そのことが頭にあったのかもしれないね。

— 特別な練習はしていなかったのですか。

木原 中学にはプールがなかったので、軟式テニス部に入りました。結構、強くて全国予選大会の新人戦で3位に入りました。

と言っても私は前衛でただ立って、後衛の島村さんに「島!島!」って声を掛けるだけ。水泳で有名になって、テニスも強かったなんて書かれているのを見ると、パートナーの島村さんに「まったく」って言われますよ。

— 水泳の方はどうなりましたか。

小学校の担任の先生が中学に様子を見に来て、「夢の実現に向けてどうしてる? 何もしなくては仕方ないぞ」と水泳のできる場所を紹介してくれました。

— 小学校の先生が、わざわざそこまで。

木原 かわいかったからね~と言うのは冗談で、私は団塊の世代で1クラス60人ほどだったんですが、安原先生は生徒それぞれに目を配り、個人・個性を尊重する教育をしてくれました。あの時、声を掛けてくれなかったら、今とは違う人生になっていたでしょうね。

— 素晴らしい先生との出会いですね。

木原 私が通った福浜小学校は、アムステルダムオリンピック銀メダリストの人見絹枝さんの出身校です。校長先生から人見絹枝さんの話を聞いて、「オリンピック」という響きが自分の中で近いものになりました。いま思えば、何か不思議なつながりがありましたね。

— その後、水泳で中学生として全国選抜大会に優勝、高校2年生で東京オリンピック出場と、華々しい活躍をされるわけですが、当時の心境や水泳に対する思いなどについてお聞かせ下さい。

木原 中2の時、地元(岡山)で国体が開かれることもあって、365日一生懸命やらなくちゃと思いました。とにかく泳ぐことが大好きで、気がついたら国体、東京オリンピックに出場していた感じです。



取材を受ける木原さん(東京オリンピック)

その後は注目度も上がって、調子が悪いと、「メキシコ(オリンピック)のホープは何をしているんだ」と罵倒されました。あの頃は選手時代が一番暗かったかな。

母に相談したら、「期待されているのだから、やるか、やめるかよ」とアドバイスされました。自分の中では「次の岐阜国体で日本記録を出してやめる」と決意して、全て新記録を出しました。

負けず嫌いですね。そうなるまでとメキシコまでと請われ、アジア大会、メキシコのプレオリンピックに出場して優勝しましたが、国内では出場記録が出せず、福井国体に出場して静かに頭を下げました。

惨めでしたよ。19歳。この時、もう2度とこういう惨めさを味わうまいと思いましたね。

ひとつひとつにピリオドをつける人生

— 周囲から見ると、あっさり引退した感がありましたが、色々いきさつがあったのですか。

木原 まあ、当時20歳はおばばですからね、引

退してもおかしくない年でしたよ。

— そうした中、大学に進学されてますが、何かきっかけはありましたか。

木原 水連の高石勝男さん(元日本水泳連盟会長)が、「これからは社会で女性が活躍する時代になるから、ぜひ4年大学に進みなさい」と進学を薦めてくれて。水泳を辞めた際も「大学中退ではなく卒業しろ」とアドバイスをいただき、物事はきちんとピリオドをつけ、次に進むことが大切だということを学びました。

— 大学卒業後はどうされたのですか。

木原 就職の時は、いろいろ声を掛けてもらって、銀行の秘書なんて話もありましたよ、真面目な仕事につくと(笑)。大学も、母校(日大)だけでなく、早稲田、立教、東海大などから誘われ、ありがたかったですね。

でも、すでに自分で仕事を始めていたので、それを続けていこうと。いま改めて、その選択でよかったなと思っています。

— 大学在学中からさまざまな仕事(水着モデルやインタビュアーなど)をされてましたが、周囲の受け取り方はどうでしたか?

木原 風当たりは強かったですよ。水連にインタビューに行って「お前は裸で何してんだ」「水着、着てます」って言い返したこともあったしね。でも、温かく迎えてくれるところもたくさんあり、自分のやりたいことを「やり通す」と言う気持ちでいっぱいでしたね。

うれし涙を流したい

— 就職ではなく、水泳の指導・普及に関わる仕事を選び、その後、ミミスイミングクラブの運営に着手されますが、どんな経緯だったのですか。

木原 最初はホテルオークラのプールでスイミングスクールを始めました。レッスンだけでなく顧問としても扱ってもらい、本当に感謝しています。今もずっと続けていますよ。

— そういう恩義は忘れちゃいけない。お世話になった企業には、それこそ「ビールはキリン、オ

イルは日清、ハンバーガーはモス」って感じで通してますよ。

そして、19歳の時に「惨めになりたくない」「流すならうれし涙を」と言う思いが原点で、30代を前にしっかり稼げる人間になろうと思った時、自分の目指す水泳をどういう形で実践していくかと考え、スイミングクラブ設立に至りました。

資金・人材など困難な問題はありましたが、キリンビールのスポーツ施設が荏原にあり、ミミスイミングクラブを始めることができました。多くの方の力添えのおかげです。

男女は相対関係

— ところで1997年からウーマンズ・スイム・フェスティバルの大会委員長とられましたね。始められた意図をお聞かせ下さい。

木原 自分だけのことを考える年代じゃなくなり、何か社会に役立つことをという思いが強くなりました。そんな時、19年ぶりにマスターズ水泳に参加して泳いだら、結構真剣になっちゃってね。会社の若い社員たちは私の現役時代を知らないから「社長、すごいですね」なんてね。

「真剣にやると人は感動するんだ」と感じました。そこで「水に感謝」という気持ちと「華やかで明るい女性のフェスティバルをやろう」という思いで、女性だけの水泳大会を始めました。

— 今年で第9回を迎え、ますます盛んな大会となりました。成功の理由はなんでしょう。

木原 今年4千人近い方が参加してくれました。役員から全て女性でやっています。でもその後ろには、応援してくれる男性の力も大いにあるんです。そういう支えのもとで、少しずつ「こんなことができるんだ」と女性たちが思えるようになってきたことかな。

性別ではなく、淡々と努力すること、そうすると結果は後からついてくることを実感、また頑張る、そういう積み重ねですかね。女性だからという逃げ道ではなく、厳しい気持ちを持つ、いい加減さを取り払う、そんな気持ちを今後も強く持つ

ていかなければいけないと思っています。

— そうした仕事を通して、女性男性の違いを感じたことはありますか?

木原 男性は体力、持久力、集中力がありますね。最近、改めてすごいなと。男性に尊敬の念を持ちつつ、柔軟に謙虚に女性もしっかり仕事をしていくことが大切。相対関係ですからね。

— 木原さんは今年6月、トータル・オリンピック・レディーズ会(オリンピックに出場した女子選手の会)の新会長にられました。どんな会にしたいと考えていらっしゃいますか。

木原 広い出会いの場にしたいですね。知られていない競技を紹介する、知らない人を知らせる、世に出す、そうした機会になればと思います。

— オリンピックやスポーツは素晴らしいんだということを幅広く知ってもらいたいですね。そして、オリンピック選手は勝つために超一流になること、運動でお金を稼げることが大切です。

人見絹枝さんは自分や後輩のために新聞記者をしながら自費で大会に出場し、過労で若くして亡くなりました。そのように頑張ってきた様々な年代、様々な競技種目の人と会って話をすることは、貴重なことだと思います。

— こうした仕事に精力的に取り組まれている原動力は何ですか。

木原 水泳が大好き、水泳のおかげという気持ち、これにつきます。3日、泳がないと機嫌が悪くなりますからね、いつも水着携帯です。

—最後にWSFジャパンへの注文・要望などがありましたら、お願いします。

木原 やめないで、続けていってください。

<木原光知子さん略歴> 岡山県山陽女子高校

1年生で東京五輪に出場し「天才美少女スイマー」と呼ばれた。引退後はマスコミ等で活躍。現在、ケイ・アンド・エム・インターナショナル社長。50m自由形日本記録保持者(55歳区分)。48年、兵庫県生まれ。WSFジャパン会員。



「山ちゃん」に教えられたこと

名古屋市守山区体育協会監事 関 美那子

スポーツは懸命に、そして楽しく

「山ちゃん」は楽しい、素晴らしい。山ちゃんは全身全霊でソフトボールに打ち込んでいる男の子である。私が地域のソフトボール指導を引き受けるようになってから30年になんなんとしている。男の子ばかりの子ども会チーム、婦人ばかりのソフトボールクラブ、男の子と女の子の混成子ども会チーム、小学校部活動の女子児童のみのチーム等々、多種多様である。

話を山ちゃんに戻す。今年4月、小学3年生の多くの仲間と一緒に、子ども会のソフトボールチームに入って来た。普通より少し細身の、神経質そうな男の子である。と、それが私の第一印象である。練習はソフトボールと野球の違いを少し説明する。準備体操のあとにダイヤモンドを使ってベースランニングをする。

それがソフトボールの練習の始まりである。子ども達は16.76メートルの本塁、一塁間をバットを素振りしてひた走る。

山ちゃんは重いバットをふって全速力で、全身全霊を投げ打つかのようにベースを走り抜ける。そして、細い黒ぶちの子ども用メガネの中から、私の方を見る。「ナイスランニング!!」と言って、私は山ちゃんの目に合図する。山ちゃんはひときわ一生懸命に、そして楽しそうに走る。

成長期の指導の大切さ

私は指導当初、バットの持ち方、ボールの握り方等を細部にわたり指導していた。しかし、その後の経験から、子どもの成長は自然にまかせ、眺めていることにした。もっとも、動作に危険をはらんでいるときは別である。

背丈だけでなく、歩幅・手の大きさ等々、子ども一人ひとりに差異があるように、その時、一生懸命に、そして天真爛漫に打ち込めるときが、子どもの成長期であり、それがちょうど小学校3年生ころではないかと思われる。

そういう時こそ、特に気をつけなければならないのは、正確で適切に、しかも簡潔にその年齢・体力にあった指導を行うことであろう。3年生でも

センス抜群の子どもは、プロ選手顔負けの捕球スタイルである。一度覚えた習慣は直すことは困難である。

そこで山ちゃんの登場が大切となる。ちょっと長めのジャージのせい、ダッシュが少し緩慢に見えるが、瞬時にボールのところまで走り、体の真正面の位置にグラブを立てて正確に捕球する。

時々“模範演技”を披露するよう頼むことがある。ちょっと照れくさそうに、私の依頼を聞いてくれる。山ちゃんは明るく、楽しく、何でも質問する研究家だと気づかされた。先の第一印象は山ちゃんの名誉のために取り消すことにする。

地域指導者が危惧すること

最近、私が気掛かりなことが2つある。一つ目は大人も子どもも挨拶が嫌いである。元来、挨拶は家庭教育の源であるにもかかわらず、教えるべき親が出来ないのである。毎年4月に新入部員が来る初日に、私の第一声はソフトボールが上手にならなくても良いから“あいさつ”の出来る子どもになってほしいと挨拶する。初日は大方、父兄



名古屋市守山区子ども会ソフトボール大会

同伴だからである。

二つ目は若者、子どもの体力の低下である。

学力中心になりがちな学校教育から健全な精神と身体は育つであろうか。高齢社会の将来を危惧するのは私達、地域のスポーツ指導者のみではなからうか。ひたすら走ることを厭わない小学生時代の最も大切な時に、ゆとりある学校体育に時間をさいてほしいと願うのみである。山ちゃんに教えられた今年、ひとしお感ずるのである。

<せき・みなこ> 1984年～2001年、名古屋市体育指導委員。2003年～、日本体育協会公認スポーツ指導者。愛知学院大学同大学院文学研究科在学中。WSFジャパン会員。

TIME TRAVEL

WSFジャパンがスタートしたのは1981年。今から4半世紀前です。その当時は一体どんな社会だったのでしょうか。この欄では、女性スポーツと女性を取り巻く社会の話題を、当時の新聞記事から取り上げ、時代の流れに目を向けてみることにしました。

スポーツ

新体操 しなやかに、人気上昇中 3年後のロス五輪正式種目に採用された新体操

<1981年4月16日：読売新聞夕刊>

音楽にあわせ、手具を使って床の上で舞う。ダンスと見まがう華麗さだが、これが立派なスポーツ。名付けて「新体操」。まだ耳慣れない種目ではあるが、1984年のロサンゼルス五輪の正式種目に採用され、一躍脚光を浴びている。

<その後> 新体操はロサンゼルス五輪の個人総合で山崎浩子さんが8位に入賞、2000年シドニー五輪では団体が5位となった。山崎さんは現在、新体操のインストラクターとして、またスポーツライターとしてスポーツを広くカバーし、幅広く活動している。



ジャズに合わせて踊る



体を動かすストレス解消に
好きな時一人で
楽しむ

ジャズに合わせて踊る「ジャギー」が人気 美容と健康“新しい汗”

<1981年8月22日：読売新聞>

美容と健康ばかりか頭の回転まで良くすると、いま女性たちに大人気の「ジャギー教室」。ジャズに合わせて体を動かす点がたちまちブームとなった。「好きな時一人できて、すぐ楽しめる点が現代人向きのようだ。」

<今は> 「ジャギー」という言葉は死語になっている。当時、同様に人気を得ていた「ジャズダンス」も影が薄く、ダンス系は「エアロビクス」が主流となっている。

社会

離婚前線は“妻高夫低” 妻から「別れてヨ」 件数最高 3分43秒に1組

<1981年6月27日：サンケイ新聞>

離婚の実数は14万1600余組で史上最高。そして、最近の傾向からみた離婚の形態は大きく様変わりし、“離婚先進国”のアメリカやソ連に似てきたことが特徴。とりわけ目立つのは女性の積極性が一段と強くなったこと。高齢者の離婚も妻が主導権を持ち、“妻としての責任をはたしたから”という言い分で何十年も連れ添った二人が簡単に別れている。

<近年は> 2001年の離婚件数を見ると、28万9836組となっており、20年で2倍に増えた。

